袖珍仙方

正德三年　奈良泉哲

禁帶出



袖珍仙方序

古今著方之書志在濟世仁人之心亦天地好生之心也諸病之救急經驗之單方散而有諸方書今錄之名袖

珍仙方窮鄉下邑於藥物鮮有之所者未必無小補云。

正德甲午十二月

法橋 奈良宗哲

袖珍仙方叙

天生地成人長養其間元氣充榮衛固則藥餌無所用也一遇有寒醫療所須其急如饑渇之於飲食欲須臾懈而不可得經方之有關乎性命亦大也奈良宗哲氏業醫名時以聘請餘暇披尋不倦嘗嫌人家日用得之易有足以治疾

者隨類纂入彙而成編蓋欲諭之窮鄉
遐陬請醫致藥難于卒辦帝門等屋之
下抱疾無告者其爲惠不亦也雖所具
未若他書多奉皆方之已驗者可濟實
用也夫蒭貴於愈疾若能奏効何更求
難得者貴遠賤近哉行之通都大邑亦
人人所檢閱不廢也宋張相公進蒭蕘
九有言誰知至賤之中有殊常之効此
編爲或近也余嘉著述意爲之叙

正德癸巳九月一日

稻若水書

袖珍仙方引用書目

外臺秘要　方勺泊它編　摘玄方
初虞世必効方　癸辛雜志　雲林神穀
醫宗必讀　明醫雜著　衛生易簡方
醫方大成　救急方　集靈方
食醫心鑑　魯府禁方　孟詵本草
種杏仙方　藏器本草　續十全方
余居士選奇方　事海文山　法生堂經驗方
近効方　仲景傷寒論　百一選方
李絳兵部手集　靈樞經　瀕湖集簡方

病源候論　唐韋迪獨行方　梅師集驗方
千金方　陸氏積德堂方　葛洪肘後方
冠氏衍義　古今醫統　南陽活人書
濟世秘覽　傷寒類要　婦人良方
本事方　本草綱目　楊起簡便方
生生編　陳氏經驗後方　醫書大全
奇効醫述　保嬰撮要　壽世保元
廣五行記　食鑑本草　九籥衛生方
蘓恭本草　已志　温隱居海上方
名醫類按　道藏經註　物類相感志

范汪東陽方　大平聖惠方　傷寒槌法
食療本草　赤水玄珠　貞元廣利方
趙宜眞濟急方　劉長春經驗方　證治準繩
邵眞人經驗方　全幼心鑑　活人心統
夏氏益奇疾方　證治要決　道藏經
危氏得効方　儒門事親　修眞秘旨
傳心適用方　陳直奉親書　孫氏集驗方
嬰童百問　周憲王普濟方　楊氏家藏方
仁齋直指方　內經素問　加宜方
遯齋閒覽　蘓頌圖經本草　蕭顯明梁史

御藥院方　醫學六要　繼洪澹寮方
延年方　周密清然齊抄　朱端章家寶方
活幼口議　陳言三因方　類經
萬病回春　集玄方　醫林集要
子母秘錄　南史　延年秘錄
醫學入門　玉機微義　孫氏仁存方
普濟產寶　丹臺玉案　楊氏產乳
朱氏集驗方　十全博幼方　產書方
唐瑤經驗方　臞仙壽域方　熊大古冀越集
心傳方　甄權藥性論　譚氏小紀方

陳延之小品方　唐仲舉方　嬰孩寶鑑
小兒秘訣　幼幼新書　隨身備急方
外科精義　秦仲南永類方　醫學正傳
癘瘍機要　簡要濟衆　李楫奇方
傳氏活嬰方　外科正宗　吹劍續錄
正體類要　開寶本草　談藝翁方
吳旻扶壽精方　證類本草　北夢鎖言
資生經　聖濟總錄　徐伯玉方
大平御覽　鐵圍山叢談　口齒類要
陳月華經驗方　程充冊溪心法　古今秘驗方

斗門方　延齡至寶方　孫用和秘寶方
錢相公籃中方　濟世全書　金匱要畧
瑣碎錄　崔氏纂要　鬼堅志
剞劂假日記　群談採餘　領要方
五行書　通變要法　丹溪怪病單
鍼灸聚英　甲乙經　博物志
王氏農書

書目終

凡例

一古來ノ明醫方書ヲ撰述スルニ多ハ易簡方ヲ基シテ歷代明醫ノ述ル所ノ易簡方ヲ集メ記スト遠國離嶋ニ至ルト雖モ醫藥ナキノ地病テ死陽ハ富饒ノ地醫藥乏カラズト雖モ一切ノ急證又ハ深更ナト二ハ醫ヲムカヘガ

タシ其上至貧ノ人ハ醫ヲムカヘカタク
重病ヲ受ト雖モ徒ニ日ヲ過シテ終ニ
死ニ至ル者多シ予深ク歎之故ニ此編ヲ
ナス惣シテ此書ニ記スル所ノ藥方ハ古
来ノ明醫經驗ノ藥方ニシテ少モ驗ナキ
藥方ニ非ス覧人深ク尊信シテ用ヘキ者
ナリ故ニ藥方ノ後ニ各出書ノ題号ヲ記
ス猶不審ノ人ハ本書ニテ考ヘシ

一此書諸病悉ク易簡方ヲ記ト雖モ病ニ緩
急アリ人ニ虚實アリ醫ヲムカヘテ脉證
ヲ祥ニシテ治ルニハシカズ此書ニ耽リ
テ醫ヲカロシメ思フベカラズ此書ハ唯
偏國或急症又ハ旅人若ハ至貧ノ人ナド
ノ為ニスルノミ

一病門ノ次第ハ萬病回春ニ隨フ然レ共古
方書ニ易簡方ナキ病門ハ闕之巻末ニ雜

病門ヲ附ス是間春ニ載ザル病ヲ集記ス

一諸方書ニ記ル處ノ藥方繁多ナリ然レ𪜈今此書ニ載ル處ノ藥方ハ民家戸ニ有ル所ノ品ノミヲ載ス故ニ藥方多カラズ

一此書ニ載ル藥種四季戸ニ有ル品ヲ以ス春有テ夏無ク秋有テ冬無ノ類タトヘバ酢瓜痢ヲ治ル李果嗽ヲ治ルノ類ハノセズ兼テ修蕾ノ類タトヘバ隔年瘧ヲ治ル

ノ類ハノセズ唯急ニ調フル藥品ノミヲ記ス

一生類ヲ殺シテ藥トスル類ハノセズ孫眞人ノ生ヲ去ルヲ遠シト云ヲ思フ故ナリ

一墮胎ノ藥ヲ載セズ夷堅志ニ白牡丹女墮胎ノ藥ヲ賣テ現ニ惡報ヲ受ト云ヘリ我儒モ亦不仁ノ事トス故ニノセズ

一古方或一斤二斤三斛ト量目ス今一

二錢或一二盞トス是專醫學正傳ノ例ニ
效フ
一此書童蒙兒女見安カラシメント思フ故
二國字俗言ヲ以テ記予不学廉忽ナリ過
ルフ多カルベシ後君子正之幸甚

袖珍仙方目錄

一丁 中風 風臓よわらしろなり
二丁 傷寒 寒氣表より裏に入なり
四丁 感冒 がいきのるなり
四丁 中寒 寒氣よわらしろなり
五丁 中暑 夏わつけよわらしろなり
七丁 食傷 食ざつきなり
七丁 中毒 何を食てわらしろといふおぼへわらバ此所にてかんぜへそのわらしろものよりきくとりを用べし
十二 痰 のどより痰いづるなり
十三 咳嗽 せきのるなり
十四 瘧 おこりのるなり
十五 痢病 大用血まじりに下るなり

十七 泄瀉 みぢかくにはらぐるなり
廿 隔 くひもの通さるなり
廿一 呃逆 しゃくいものるなり
廿二 饋雜 むかれくやまひなり
廿三 痞 むかえられつかえなり
廿四 水腫 一身ことごとくくそれ しろやまひなり
廿六 黄疸 惣身黄なる病なり

十八 霍亂 そうはいさしてあげも くだしもせぬなり
廿 嘔吐 ゑづきありて吐逆 するなり
廿二 呑酸 さきおくびのひさし いづるやまひなり
廿三 氣鬱 氣のつきなり
廿四 鼓脹 手足八つのれどく腹ハり 大まえれさる病なり
廿五 積 むかえられかさまり ありていたむなり
廿七 吐血 血をはくなり

廿七 衄血 鼻血のあるなり
卅 諸血 一身の中づつさよりなり とし血のあるをいふ
卅一 汗 春秋冬のわつくもなき 時なのゆへしなく汗あるなり
卅二 麻木 身のしびるし病なり
卅四 癇 俗云くつりやこなり
卅五 驚悸 うりそめれるまも おとろくやまひなり
卅六 邪祟 つきものくるなり

廿九 下血 大便のあてさきは 血のあるなり
卅一 小便血 痛なく小便に血 いづるなり
卅二 眩暈 めれまふ病なり
卅三 狂 きちがひのるなり
卅四 健忘 物をもれする病なり
卅五 不寐 ねられぬやまひなり
卅六 小便濁 小便の濁る病なり

卅七 遺精 独てゐる内に精のもらるなり 俗云 しゝぞうのるすなり
卅八 遺尿 小便たるゝなり
卅九 大便不通 大便通ぜざるすなり
四十 痔 尻の穴いたむなり
四二 虫症 むしくらるゝなり
四三 鬚髪 かしらひげのやまひなり
四五 耳 こゝぐれなど惣じて耳のやまひなり
卅七 淋病 小便道いたこころかく通ぜざるなり
卅九 小便不通 小便通さるゝなり
四十 大小便不通 大便小便表方ともに通さるなり
四一 脱肛 尻の穴それ出いたむやまひなり
四三 頭痛 つぶりのいたみなり
四四 面 かどのやまひなり
四六 鼻 鼻のやまひなり

四七 口舌 口舌のやまひなり
五十 眼目 目のやまひなり
五二 癭瘤 こぶれるすなり
五四 脇痛 わきぐれいたみなり
五五 疝氣 脇ひきつりいたむなり
五六 血崩 月水ふりにおびたしく通じて止ざるなり
五七 産前 子をうむまへなり
四八 牙齒 齒のやまひなり
五二 咽喉 のどのやまひなり
五三 腹痛 はらのいたみなり
五四 腰痛 こしのいたみなり
五六 婦人經閉 月水の通ぜざるすなり
五七 帯下 しらながらなり
六一 産後 子をうしなわしなり

六三 乳病 ちのやまひなり
六四 前陰 小便道の病なり
六五 小兒初生 生れ出る時なり
六五 不乳 生れ子の乳なのミつかぬなり
六五 不尿 生れ子小便せざるなり
六五 大小便不通 大便小便通ざるなり
六六 撮口 口を閉啼聲出ざるなり
六六 臍風 臍より風引なるやまひなり
六六 臍瘡 へそよりしるなり
六六 口瘡 口中ゆまひなり
六七 軟癤 なるぶれなりなり
六七 丹毒 もやくさのくすなり
六八 夜啼 よるさのくすなり
六八 盤腸 こしをうごめてなくなり
六九 語遲 ものいやすおそきなり
六九 驚 なくなり
六九 疳 ちくぐりてつゐるぞ食をこのひなり
六九 痘 おしさうのくすなり
七十 外科癰 せなかにできるもれものなり
七一 疔 うをまた足に出来るかられなき出来のなり
七二 便毒 よこねのくすなり
七二 下疳 陰莖のゆまひなり
七二 膁瘡 ちときりされるなり
七三 疥瘡 ひどんぐさのくすなり
七三 癜風 なまづのくすなり
七四 厲風 ろうさのくすなり
七四 諸瘡 ゆじて瘡の類いろくれるすあつめ記也
七八 杖瘡 打撲のろいなり

七九 金瘡 切さぎ血とめなり
八十 湯火傷 やけどなり
八一 虫獸傷 虫のしたらと獸の食たるこのるなり
八五 骨骾 のどにかゝるなどのたち たるなり
八七 五絶 縊て死たらと魘て死たらと水にはまりて死たらと
るさ不ようなりて死たらと凍死との茅なり
九十 中惡 死人の毒氣にふれたらゆまひなり
九一 雜病 いろいろのゆまひをあつめのす

目錄終

袖珍仙方

法橋 奈良宗哲 撰

門人 前川正哲 校正

●中風

○中風口噤恍惚として手足しびれ或ハ腹中痛或ハ息絶又息出るにハ

伏龍肝 かまどの下の灰の下のやけ石なり そ又粉にして水茶碗に一ぱい半入一ぱいに煎用てよし

千金方

○又方

艾そ又水茶碗に二ぱい入一ぱいにせんじ布

切と浸て布切をあたゝめ志ぶりノ胸をあたゝめ
てよし冷もバ度々かへ用ゆ　陸氏積徳堂方

○中風腹痛ハ
素湯ハ塩をさそく用ゆし痰を吐て早速
よいこみやむなり　肘後方

○中風口噤さるにハ
芥子　青ゑ醋茶碗ハ二ゑ入一ゑにせんし
頷頰の下につけてよし　冠氏衍義

○中風口喎さるハ
石灰醋まて炒てこねて泥のごとくし頰ハ
塗左へゆがさるハ右ハぬる右へゆがみさる
ハ左の方へぬるべし　冠氏衍義

○中風口喎斜て二年も三年も愈ざるハ
青松葉五ゑ細剉絹の袋ハ入酒五合入煎て
二合半ハなりさる時松葉を取出してもて酒
どりおしづくのむべし　古今医統

○中風眩ハ
蟬退　ほとのぬけがらなり　しらとおしをもちゐべし　弐ゑ少し炒て粉にして

酒にてのむべし

古今医統

○中風夢中の様になりたるには
香油（ごまあぶら）生姜汁（しやうがのしぼりしる）等分に合て少づゝ用てよし

千金方

●傷寒

○熱つよくさし頭痛するには
艾三匁水茶碗に三ぱい入一ぱいにせんじ
りらひてよし

肘後方

○又方

葱白鬚（ひげ）とも其匁生姜三分水茶碗に三ぱい入一ぱいに煎用てよし

南陽活人書

○傷寒病付て二日三日の内には
葱白廿本細に剉白粥の中へ入よく煮て醋少入て食べし汗出てよし

済生秘覧

○懐妊の傷寒熱つよく發斑出るには
艾五匁酒茶碗に一ぱい入一ぱいにせんじ
りらひてよし

傷寒類要

○又方

葱白 木水にてせんじもらひてよし
葱と食べし
傷寒類要

○懐妊の傷寒人をも見ることは夢中になり
ころにハ
艾十匁醋にて至極熨く炒つけて絹に
包臍の下を熨暖てよし
婦人良方

○陰證の傷寒手足冷て腹痛にハ
硫黄 つけ木のたきさ をな 艾三分つゝめとく
せんじ用てよし
本事方

○傷寒を病て間のなき女に嫁して傷寒の毒
氣を傳染熱つよきにハ
両方とも尖巴ころ鼠の屎韭の根煎
じのみてよし
活人書

●感冒 がいさのなり

○風引ころにハ
胡麻 黒胡麻よし然れども黒胡麻
なき時ハ白胡麻にても用ゐし 式な成程
よく炒あつき内に酒にてのこ物を著て寐て
汗をかくべし
本草

●中寒　寒氣にあたりたるなり

○卒に寒氣にあたり唇青く卵縮六脉なきが
ごときには
葱一把根と青き所とを切て捨白こをあつく
わたり臍の上にをきて艾にて幾度も灸
すべし葱焼きバ度くかへて手足あたし
まるまで灸してよし

南陽活人書

○又方
湯にて芥子をとき臍の中に一とへにつめ
きる物の外より手拭を湯につけしぼりてあた
むべし冷きでさらべく手拭を湯にはけ
わたしむべし

楊起簡便方

○寒氣にあたり手足冷て腹痛には
艾五分あつき湯にひたし臍の中に入て
よし

生生編

○又方
黒大豆五合炒て皮を捨酒茶碗に三盃入
一盃にせんじ酒をのむべし

古今医統

○又方

胡椒五分酒まてせんじのみてよし

古今医統

○又方

塩を炙れ手に一といわつくいり布切につゝみ
臍の上をわたゝむべし塩冷バいくたびもかへ
てわたゝむ事し

古今医統

●中暑　夏わつけにわたりたる病なり

○暑氣にわたり既に死とするにハ
胡麻そのあつく炒新汲水にてのみて
よし

経験後方

○暑氣にわたり頭痛するにハ
砂糖を水にてのみてよし

古今医統

○暑氣にわたり既に死とするにハ
新汲水少し鼻の孔へ入て扇にてあをく
事しかし至極重き病人なるバ日れわたら
ざる地を一尺わまりかりて其中へ水を入てうさ
ぶらかし其水を鼻れ孔へ入事し少も水をのま
しるゝなかれかし水を飲バ死を

古今医統

○暑氣にあたり咽渇き死ともるにハ
路上熱土（ひなこのわつきつらなり）蒜等分をもりたゞらし水に
かきたてゝ人のもとゝろ水を用ゆ
古今医統

○旅人又ハ農夫目にてうされて暑氣にあたりすぐ
に死ともるにハまづ其病人を日陰につ
きゆきあとのけに孫させ並日向乃土を
脾のぐるりに堤のごとくにをき外れ人に病
人の脾乃中へ小便をさしべしたらまら
によし
医書大全

○又方
生姜と蒜とを熱さ湯に入りみくだき
湯とともに飲ゆし
古今医統

●食傷

○一切の食傷に
地漿水（日れあたらざる地を一尺あまり堀てゝれ中へ水をたゝかしたるなり）
のみてよし
本草

○一切の食傷腹痛にハ
塩湯多くのみてよし
奇効医述

○小兒食傷ハ
鳥の羽根咽ニ入て探ル食物をもらさ
てよし
保嬰撮要

●中毒 何を食てあたりたるしいふ覺わらべ心不まそ
うんぬべそのあたりたるゆゑよき茶を用べし

○一切の毒を消ハ
黄龍湯 雪隱のつぼれ中のうへ水なり飲てよし
蘓恭本草

○砒霜石の毒を消ハ
黒大豆せんじのみてよし
肘後方

○酒肴多く過して腹脹たるハ
塩を歯にぬりて湯を飲べし如此二三遍をれ
ば雪れ消るがごとく脱ゆる
壽世保元

○酒食のあたりたるハ
黒大豆 或ハ白大豆 半合つゝのごとくせんじ
のみてよし
廣記

○酒を過して嘔あるハ
赤小豆煮て食てよし煮汁をもとのまて
よし
食鑑本草

○酒乃二日醉ハ

黒大豆煎じてのむべし　本草

○又方

赤小豆せんじのむべし　本草

○又方

生蘿蔔おろしまぜり汁飲てよし　本草

○焼酒多く飲て醉醒ざるまハ

病人を寐させて豆腐を薄く切肪の上に

ならべをけば醒る　本草

○焼酒に醉て死としたるごときまハ

汲たての水に病人の髪をひたし手足に

水をかけてよし　本草

○酒を過して肪くざるまハ

石灰を醋まて丸じ用ゐし　本草

○又方

五倍子　女のたぐろつくろときつくろあしまり　おまてのみて

よし　本草

○一切の魚の毒にあたりたるまハ

黒大豆せんじのむべし　衛生方

○河豚の毒にあたりたるには
胡麻の油のみてよし
本草

○又方
黒大豆せんじのみてよし
本草

○又方
地漿水 旧のあたらぬ地を一尺ばかりてうれ中へ
あと入りきまごうかしたるあり
のみてよし
本草

○一切の魚に醉たるには
陳皮 みんの熨じ飲てよし
肘後方

○章魚蛤蜆烏賊などの蟲魚の毒にあたりたるには
醋小茶碗に一盃のみてよし
本草

○又方
胡麻油一盃のみてよし
本草

○又方
蜀椒食てよし
本草

○又方
胡椒の粉のみてよし
本草

○蟹の毒にあたりたるには

紫蘇乃せんじ汁のみてよし或ハ生の紫蘇
食てもよし　医統

○卵又雞の毒にあたりたるにハ
醋のみてよし　医統

○鳩食て毒にあたりたるにハ
葛の粉水にてのみてよし　医統

○又方
生姜湯乃みてよし　医統

○六畜の肉を食て毒にあたりたるにハ
伏龍肝（かまどの下の灰乃下のやけいしなり）を水にてのみ
てよし　千金方

○又方
小豆黒焼にして水にてのみてよし　千金方

○自死たる獣の肉を食て毒にあたりたるにハ
古頭巾の垢を水湯にてのみてよし垢
を水にてなき時ハ古頭巾を煎のむべし　千金方

○諸菜乃毒にあたりたるにハ
人乳（女のちなり）童便（六七歳にてのみの小便なり）等分に合て

のみてよし

○一切の菌の毒にあたりたるには
小便のしてよし

海上方

○又方
地漿水 月めあたらざる地を一尺ばかり堀て其中へ水をあらきにごらかしたるなり
のみてよし

時後方

○又方
金銀花 きんぎんのはななり
のしてよし

本草

己志

○柿李蒲萄棗柚林檎桃梅惣して一切の菓子の
毒にあたりたるには
胡椒の粉白湯にてのびべし

道藏經

○一切の麵類の毒にあたりたるには
生蘿蔔のおろし汁のみてよし或は食て
もよし

医統

○豆腐の毒にあたりたるには
生蘿蔔のおろし汁のしてよし又食て
もよし

各医類案

○茶を多く飲て脹脹さらるハ
醋をのみてよし　物類相感志

○一切の藥の毒にあたりさらるハ
生姜食てよし　千全方

●痰

○一切の痰證にハ
塩湯のみてよし　外臺秘要

○痰切れかねるにハ
浮石粉にして白湯にて飲てよし　本草

○又方
五倍子　かのしぶろくろとき　白湯にてのみて
つくるあしたり
よし　本草

○又方
生姜をりくだき白湯にてさうひく
用てよし　本草

○水のやうなる痰出るにハ
艾を又常のごとく煎じ用なし　本草

○一切の痰證久しく愈ざるにハ

陳皮 みかんの ハなり 四拾目水茶碗に五盃入てころく
とせんじつめくあなくなりさる時粉にして
白湯にてつゞまりもべし
泊宅編

○痰火のがりて狂人のごとくなりさるにハ
上々の茶梔子等分水にてせんじもちひ
てよし
摘玄方

●咳嗽 せきのるなり

○咳初て出さる時
生姜黒焼にして白湯にて用てよし
本草衍義

○咳やまざるにハ
生姜 そぎ 餳 ぢまう せんなり 五匁よくつき合鍋にて
よく煮て熱き内に食てよし
初虞生必効方

○又方
浮石粉にして湯にて飲てよし
肘后方

○又方
蜜一盃 香油 ごまのあぶら なり 生姜汁 しやうがれしぼ
右等分火にてとろくと煮つめごろく
となりさる時少づゝ用てよし
雲林神穀

○又方
生姜薄く切焙粉にして糯米の食にて丸
食の湯にて用てよし　癸志

○小兒咳嗽やまざるにハ
生姜四拾目湯にてせんじ其湯にて行水
させてよし　千金方

●瘧　おこりのるなり

○瘧毎日又ハ日まぜに發にハ
生姜四ヶ汁を絞椀に入一夜外へ出して
夜露にうたせて其翌日早々に北の方に向
ひて飲べし其日落ぎハ再飲なし　易簡方

○又方
生姜の絞汁小茶碗に一盃飲てよし　明医雑著

○又方
狗蠅一疋頭と翅とを除て蝋にて丸ゞ
發日の朝冷酒にて飲てよし　医方大成

○又方
常山とされのるなりそれ茶碗に水二ヘ入

一ていにせんじ用てよし　医宗必讀

●痢病

○大便血まじりて下ゆにハ
塩を紙に包わくなりなど燒てさゆし
て粥にいまし食てよし　急救方

○又方
五倍子　米のとぐろつくろ時　五分生又五分ハ黒
燒にして已上を水にて丸し　赤ろうにハ
温酒にてのみ白痢にハ水と酒と等分に
合てのみ水のごとく下ゆにハ食の湯にて
のむべし　集霊

○赤白下痢にハ
葱白粥の中へ入てよく煮てくふて
よし　食医鑑

○又方
生姜を炙　艾五分　つゆのごとくせんじ
もらいてよし　医統

○赤白下痢又ハ泄瀉或ハ心腹のいたみ痔血

を治する方

艾そる　生姜三分醋と水と等分にいれ
一ていはせんド用てよし　医統

○痢病不食するにハ
山藥五分生又五分ハ炒二色ともにつき
くごき食れ湯にてのむべし　衛生易簡方

○又方
糯米半合生姜のしぼり汁少し入炒粉に
して白湯にて用てよし　魯府禁方

○又方
梅子そツ核を捨上々れ茶そるとこの合て
醋と湯と等分に合てのこてよし　医統

○又方
上々の煎茶のこてよし　孟詵本草

○痢病愈て後不食するにハ
赤小豆煮て食てよし　医統

○小兒の痢病にハ
雞子湯に煮て白こを捨黄なるところ

ぢりさりくぐき生姜のちぢり汁にて用べし
二三日茶をのむべかゞ
種杏仙方

●泄瀉　水のごとくまたしくぐるるなり

○他國へゆきて水かつり或ハ旅の中に腹くぐる
ハ
鞋の底にゝなりたる土を水にかきた
てゝのみてよし
藏器本草

○暴に瀉痢ハ
百草霜　なべかまの下のすゝなり　食れ湯にてのまて
よし
續十全方

○又方
艾そな生姜三分つゝのごとくせんじ
もらいてよし
生生編

○夏の中水のごとく腹くぐるハ
五倍子　女のとぐろつゝろ時　粉にして白湯に
て用てよし
余居士選奇方

○小兒腹下ゑ腹かたく大きなるハ
多く垢の付たる着物を四五寸切て水に

て常のごとくせんじ用へし

千金方

●霍乱

○霍乱吐も痢もせざるにハ

地漿水 比と一尺わまりわりてその中へ水を入りさまざりしるあり

小茶碗に二三盃のみてよし

千金方

○吐川下川とるにハ

釜の底の墨五分竈の口の墨五分白湯を至極熱して酌上くすること百度して彼二色の墨を入てのみてよし

經驗方

○又方

屋根裏へ下りたる煤五分ばかりわかさ白湯にてのみてよし

衛生易簡方

○又方

道に捨たる破草鞋一そく鼻緒の所を一寸ばかり切捨水にて二三度洗てのち湯にてせんじのむべし

事海文山

○腹痛て吐も痢もせざるにハ

塩湯を多くのみてよし

本草

○又方
塩をわつて炒て布に包腋背をわかめてよし　救急方

○又方
生姜を水にて常のごとく煎用てよし　肘後方

○又方
石灰五分醋にて飲てよし　摘玄方

○吐逆やまざるには
糯米粉にして水にて飲べし　医統

○又方
艾を水にて常のごとく煎用てよし　古今医統

○乾嘔やまざるには
薤葉水にせんじもちゆべし　千金方

●嘔吐　ふづきわりて吐逆をとるなり

○嘔やまざるには
白胡麻を胡麻油茶碗に二とい入一といはせ
もちひてよし　近効方

○又方
生姜代々醋茶碗に三盃入一盃に煎用てよし　食医心鑑

○又方
ひねの粟一合生姜のしぼり汁茶碗に一盃水茶碗に三盃入一盃にせんじつめて用べし
心鑑

○又方
陳皮みかんの四分生姜八分水茶碗に二盃入一盃にせんじのみてよし
仲景傷寒論

○乾嘔やまざるに
生姜食てよし
心鑑

●嘔

○嘔病發て食物通せざるに
伏龍肝やりつらなりをゝ粉にして食れ湯にてこひくのむべし
百一選方

○又方
芥子の粉酒にて毎日一匁づゝ飲べし
千金方

○又方
生姜粥に煮て食てよし
兵部手集

○又方
昆布五匁よく洗小麥二合水茶碗に三盃入

煎ド小麥よく煮たる時汁をのむべし又昆布一切口に入て常に昆布の味をのこしむべし

医統

○又方

鬲年炊米 去年の行鬲なり道明寺 急なる流川の水にて粥のごとく煮て上湯を飲べし

医統

○又方

生韮のしぼり汁毎日小茶碗に一ぱいぼくのみてよし

名医類案

●呃逆 しやくりのなるなり

○呃逆やまざるには

帯撚を鼻へ入噎してよし

靈樞經

○又方

生姜汁背にぬつてよし

本草

○又方

竹節 竹のまさきいめをけづり捨うとおをさしころなり湯にてせんしもらひてよし

本草

○又方

柿帯 くしげさのつくなり ころがされてこうなり梅干 きつ水茶碗に

一盃入六分にせんじ用ゆべし　医統

○又方

川椒の粉醋にて丸白湯にて用てよし　医統

●呑酸　すきおらびのひさとかかやまひなり

○醋きゝおらびいでやまざるにハ

生蘿蔔をしぼく食てよし　集簡方

○又方

頭の垢水にてのみてよし　本草

●鱠雜　ひねのうくやまひなり

○胸心あしきにハ

醋小茶碗に一盃のみてよし　本草

●氣欝

○氣の鬱しるるにハ

赤小豆煮て食べ鬱氣を散す　本草

○又方

黒大豆煮て食て中を調氣を下す　本草

○胸冷て氣のぼるにハ

生姜食てよし　本草

○又方
蜀椒食てよし
本草

○又方
蘿蔔食てよし
種杏仙方

●痞 むしろのつゝえなり

○心腹痞て痛こしなんとするにハ
塩を水にてせんじのびべし
指師方

○本に腹痞瘥でハ又痞にハ
韮のしぼり汁のみてよし
唐韋迪獨行方

○飲食過て腹痞にハ
正しくかしこまり引息を臍の下までぞ
け又出す息を臍の下よりおすかくのごとく
に四十息されば愈
病源候論

●皷脹 一 討足ハつゝのごとく脹ぐるり大にたれらやまひなり

○腹腫て大になりたるけバ鼓のごとく鳴にハ
蒜の根皮を去て綿に包なるがこわつゝ
炒て大便道へ入冷ましハ又易幾度も入て
よしこれ大便通ぜさる病にもかくの

どくしてよし

衛生易簡方

○又方

生姜をあつく火にあぶりて綿につゝみ大便道へ入冷れば又かへてつゝめへては

梅師方

●水腫 一身とくくれたる病なり

○五體手足悉腫たるには

黒大豆茶碗に一盃水茶碗に五盃酒茶碗に五盃入三盃に煎用てよし

千金方

○又方

黒大豆水にて煎用べし

范汪方

○風腫にそれいたむには

牛房の實を白湯にて飲べし

聖惠方

○足腫たるには

葱のせんじ汁にてたびく漬洗てよし

韋宙獨行方

○卒に陰腫たるには

牛の糞黒燒にして酒にてはけてよし乾バ又つけてよし

梅師方

●積 むしろにきまりわりていたむなり

○胸腹に積のきまりわりて痛にハ
毎日醋かづくのみてよし　本草

○又方
昆布を常に食てよし　本草

○又方
蜀椒食てよし　本草

○又方
浮石粉にして白湯にて飲てよし　本草

○食物迄て積となり痛にハ
梁上塵 やねの下れけたのうへのほこりなり 飲てよし　本草

●黄疸 熱身黄になる病なり

○一身皆黄になり小便も黄になりたるにハ
生姜にて惣身をするべしいつとをなく
黄色退き愈　傷寒槌法

○又方
乱髪 男女のぬけたるくしのおちなり 黒焼にして
毎日水にて服べし　時后方

○又方
柳の木せんじのびべし
外臺秘要

○又方
梅樹根粉にして酒にて飲べし
食療本草

○又方
蘿蔔の實粉にして白湯にて飲てよし
古今医統

○又方
生蘿蔔炒粉にして弐匁づゝ白湯にて
用てよし
赤水玄珠

●吐血　血をはくなり

○吐血やまざるにハ
伏龍肝　下のやけつちなり　粉にしてをゑ
水にてのみてよし
廣利方

○又方
鍋墨水にてのみてよし
濟急方

○又方
艾水にてせんじ用べし
千金方

●衄血　鼻血の出るなり

○鼻より血出て止ざるにハ
左よりおぼ左の足を水にひたし右より
おバ右の足をひたしてよし　本草

○又方
伏龍肝　うまどの下のもいれ下のやけつちなり　汲まそ乃水にて
のみてよし　廣方

○又方
百草霜　糯米を煮たる湯にてのみてたち
まちにとまる　劉長春經驗方

○又方
艾水にてせんじのみ或ハ鼻乃わなへ
艾の煎汁を入筆の柚にて吹てよし　聖惠方

○又方
五倍子　女のもぐろつくる時つくるふしなり　鼻のわなへふき
いまてよし　衛生易簡方

○又方
生蘿蔔のおろし汁鼻の孔へふき入
てよし　壽世保元

○又方

蒜つきくだき泥のごとくして厚さ弐分ばかり大さをすす四方にして脚のうらにつくる右の鼻れ孔より血あれば右の脚のうらにつけ左の鼻の孔より血あれば左れ脚のうらにつけ反方よりあれば反方れ脚のうらにつけてよし

医統

○又方

糯米を反黄色に炒新汲水にてのむ

ぞし

医統

○又方

鼻血あり方れ手の小指をこよりにて痛かどむさぶへし左右とも有るにハ反方れ手の小指くりてよし

證治準繩

○又方

白紙を拔新汲水に浸し四ツに折頭れ百會にあて上よりさすれば忽止

證治準繩

●下血　大便のあとさきに血の下ちなり

○大便のあとさきに血乃下ゆるハ
百霜草弐匁食の湯にいれ一夜卵へ
出して夜露にさらし翌日空心に
服してよし
邵真人經驗方

○又方
艾生姜等分水にてつゝのごとくせ
りひてよし
千金方

○又方
五倍子 女のこゝろつゝ時 食の湯にて
のみてよし
全幼心鑑

○又方
黒大豆炒焦粉にして酒に入ざると
煎大豆を去て酒より飲てよし
活人心統

○又方
小豆そゝ粉にして冷あまて用
てよし
梅師方

●諸血 一身の中何方なりとも血のおろしなり

○惣身の毛の竅より血おて止ざるハ

生姜のおろし汁のみてよし　奇疾方

○又方
乱髪　黒焼よしてつけ又水計
鼻の孔へ吹入てよし　醫治要決

○口鼻耳前陰後陰より一度に血あるにハ
生蘿蔔のおろし汁茶碗に一ぱいのみて
ゝらすまちにとまる　證治準繩

○一切の出血にハ
乱髪　黒焼にして水にて
のみてよし　聖惠方

●小便血　痛なく小便に血あるなり

○小便の後に血出るにハ
乾柿　黒焼にして食の湯
にてのみてよし　医統

○又方
胡麻弐匁粉にして水茶碗に二盃入浸て
翌日早朝に成程熱く暖のみてよし　千金方

○又方

醋茶碗に一盃塩五分入煎飲てよし　廣利方

○又方

五倍子　女のそろつらる時はらるゝなり　梅干の肉にこね合せ酒にて用てよし　集簡方

●汗　春秋冬のあつくもなき時はの出もなくて汗おろなり

○一切の汗に用てよし

小麦黄色に炒て五分椒目五分水茶碗に一盃半入七分にせんじ一夜外へ出し夜露にうらせあらためのみてよし　救急方

○又方

五倍子　女のこそろ付方時はらるゝなり　津にて祈り腋の中へ一盃入紙にてきこしてとくべし　集霊

○目の覚てある時汗出るにハ

糯米黄色に炒粉にして布袋に入汗の出る上をかとくとおべし　道蔵経

○盗汗やまざるにハ

既に寐とも時少し腹をもたけとき焼餅をかり食て湯水をのまずして臥をべし

二三日して汗止

● 眩暈 めのまふ病なり

医統

○ 眩やうまてふくくしとるまへ

生姜ぬしぶり汁茶碗に一盃飲てよし

本草

○ 又方

蝉退 せんのぬけがらなりこしらと

わしとをさり 粉にして

食の湯にてのとてよし

医統

● 麻木 しびれておもくなり

○ 惣身麻てまのやうになりてうるまへ

芥子の粉醋にてどきあらせ 忽は

済生秘覧

○ 胸しびれたるまへ

忽白を煮て多食てよし

危氏方

○ 五體 しくく痺たるまへ

胡椒一撮 葱白三本細切 塩一撮 小麥粉四五合

酒茶碗に二盃 醋茶碗に二盃入銅鍋にて

わつくわたくめて痺たる所をむしと蒸し

汗出て愈一両日風にわたるぬやうにすべし

医統

● 狂 こちがいやまひなり

○狂乱してわづくはハ
伏龍肝 うまどの下の灰の下のやけつらなり 粉にしてそゑ水
にてのみてよし
千金方

○又方
人の屎 黒焼にして酒にて用ゆ
千金方

○又方
鐵漿 せのつくろ たぐろなり 茶碗に一盃用ては
医統

○笑て晝夜やまずとに狂にハ
塩をもかどわくなりなど燒て河水にて
一度に用ゆし痰を吐てよし
儒門事親

○一切の狂氣にハ
鼻の下の溝の真中に北壯灸をすれば忽に
正氣になり左に圖あり見合せ
医統

●癇 俗に云くつらやまなり
心下に北壯灸をすべし



○癇症おこりて久しく成しらハ愈ぬものなりしを
初て發るにハ両の手の大指を二な一所によせ

てくるゝ二なの指の爪と肉との四所へくろやう
に灸すべし左に圖あり見合ぶし



此黒の下に灸すべし

医統

●健忘　物をとれず病なり

○うかゝと物ひとれずるにハ
石菖蒲の根毎日食てよし

医統

○又方
戊子日　桃枝二寸切て枕の中へ入置て枕に
とれど物ひとれ

聖恵方

○又方
七月七日蜘蛛一疋とりて我衣裳の間又ハ
衣裳を入る箱などの中へ入置て人にしら
せるなかれ次日ぢりの後一切乃事
わとれず

聖恵方

●驚悸　うちのゝまにしおどろく病なり

○常に物をひえして何となく恐しさやうなるにハ
胡麻油毎日少宛のこてよし

本草

●不寐　祈しきね病なり

○何のみもなきに夜寐られざるにハ
燈心水にてせんじのむべし　集簡方

○晝夜ともに寐られざるにハ
新き布切を火にて焼くわざり目の上を
ひさねなぞ又大豆をわつくひして袋に
入枕にして寐れば其まゝ寐らるなり
枕の中れ大豆冷れば又入てわさくむべし
二三日如此をれば其まゝと愈　肘後方

●邪祟　つきものゝなり

○一切の邪鬼妖魅野狐乃たぐひなにとをられぬ
やまひにハ
桃奴　桃の木の梢に落ぎして久しく粉にして
酒にて用てよし　医統

○又方
麦手の大指二ヶ縄にてくゝり肌肉四所の角
に灸してよし灸の仕やう癇　卅四丁目に
圖あり見合をべし

○又方

空に向ひて 卌 如此指にて書畫し九龍符といふ是なり早速なり

種杏仙方

●小便濁 小便の濁る病なり

○小便白く濁るには

冬瓜の實炒て粉にして空心に白湯にて用てよし

道藏經方

○腎虛して小便濁るに

韮の實炒粉にして食前に酒にてのみてよし

聖惠方

●遺精 寐て居る内に精のもるなり 俗にいふもうぞうなり

○男女ともに夢を見て精汁泄出るには

韮の實生にて卅粒空心に塩湯にてのむ畫し

藏器本草

○腎虛して夢に精泄るには

韮の實弐匁少し炒て粉にして食前に酒にてのみてよし

大平聖惠方

○又方

山藥 そ多 葱白五分 塩少已上三色酒れ
中に入よく煮たる時酒ともに飲てよし 赤水玄珠

● 淋病

○熱淋 胸の中にねつありて 血淋 小便に血おて渋痛
淋病にあるなり 痛なきハ尿血なりにハ
赤小豆三分炒粉にして葱一本酒の中に
入煮爛しのみてよし 修真秘旨

○急淋陰腫たるにハ
葱煨杵爛りして臍れ上に付てよし 外臺

○小便渋痛にハ
葱白皮赤を一寸切て臍の上にをきて七
壯灸してよし 經験方

○石淋にハ 小便の中より砂のごとくなる物いづるなり
浮石粉にして水醋等分に入つれごとく
せんじ用てよし 傳心適用方

○又方
乱髪黒焼にして水にて用てよし 肘後方

○血淋にハ
竹節 竹の青さ皮をけづり捨
うしと青さ不をかつたりと 五多水茶碗に

二盃入一盃に煎空心に用ては

集験方

○老人の淋病には

小麥拾ゑ燈心五分水茶碗に二ぐい入一

ていにせんじ用てよし

奉親書

●遺尿　小便たるゝなり

○寐て居る内に小便あるをしらざるには

白紙を放其病人の寐る下にしきせて寐

させその白紙に小便をしるやうにして翌

日取出し黒焼にして酒にて用ては

医統

○又方

五倍子　女のそぐろつゝる時　五分皮五分八黒焼

にして已上を粉にして糊にて丸じ食

の湯にて用てよし

嬰童百問

●小便不通　小便通せざる病なり

○小便通ぜざるには

梁上塵　やねの下桁の上のかたりなり　二撮ありてもらひ

ひてよし

外臺秘要

○又方

濡たる紙に塩をつくし成程よく焼て少許
小便のある所へ吹入てよし

普済方

○又方

葱白一把炒わらくして臍の下を度く
あたゝめてよし

本事方

○小便なくおんとしておぼ痛にハ
古き筆の毛の所バかり黒焼にし水に
てのみてよし

外臺

●大便不通　大便つうせざるなり

○大便通ぜざる心わしきにハ
胡麻米と等分に合粥に煮て食バ通
ぜるなり

肘後方

○又方

蜜五両銅鍋にてどろくと炒つめかた
まりたる時かたくまるめ尻の穴の内へ入
をくべし大便通ぜんとやふ出来たる時
の蜜をのく奄し

仲景傷寒論

●大小便閉　大便小便表方ともに通ぜざるなり

○雄鼠屎　ねをこのふんなり　粉にして臍の中へ水にてつくれば忽通ずるなり　普済方

○又方

塩を酒にてとき臍の中につけ又塩水を尻の穴れ中へ少し吹入又塩水を少しのむ登し妙に通ずるなり　家藏方

●痔

○痔おこりて痛にハ

胡麻を煎し洗てよし　本草

○又方

五倍子　せのちぐろつゝる肉つるふしなり　煎洗てよし　直指方

○痔血出るにハ

小豆を酒にて煮酒を炒つけて乾時粉にして酒にてのむべし　肘後方

○又方

葱白湯にてせんじむし洗てよし　外臺

○又方

鯽を煮て食てよし

食医心鑑

○又方

榧の實つゝ食てよし

経験方

●脱肛 尻の穴をれぶ痛病なり

○脱肛痛甚しきには

梁上塵 やねの下の桁の上のぞりなり 鼠屎二色を火に

焼薫じてよし

済急方

○又方

石灰熱く焼縮につゝみ其上に座して

よし冷れぞ度くあたゝめかへてよし

聖恵方

○又方

五倍子 女のたぐろつゝる内つゝるふしなり 百草霜等分粉にして

醋にてとき鳥の羽にていたむところへ

つけてよし

普済方

○痢病にづいて脱肛出るには

塩をあつく炒て縮につゝみそのうへに座し

てよし

肘後方

●虫症 ゆ 肢のるなり

○虫腹を痛め顔の色白く唇赤く口に水を吐にハ
艾三日常のごとくせんじ用てよし　肘後方

○又方
小麥の粉白湯にてのみてよし　本草

○又方
蜀椒酒にてのみてよし　本草

○又方
榧の實酒にてのみてよし　本草

○又方
塩湯のみてよし　本草

●頭痛　つぶりの痛なり

○一切の頭痛に
生蘿蔔のおろし汁少しづゝ鼻の孔へ吹
入てよし右ぢり痛にハ右の鼻へ吹入左痛
にハ左の鼻へ吹入左右とも痛にハ反方
の鼻の孔へ吹入てよし　加宜方

○又方
大豆よく炒て酒に漬又大豆を湯煮して

友方等分にまぜあいせ毎日七日ゆどゲ
同くひてよし　千金方

○飲酒頭痛とるにハ
竹茹（竹の青き皮をけづり捨ふとゝ青き所をとるさらなり）五匁雞子そつ
つ○れにくせんに用てよし　千金方

○脳痛にハ
桃の葉を多く集て枕にしてよし　遯齋閒覧

●鬚髪　くまひげのやまひなり

○白髪拔て黒くせんとおもふ
生姜の皮拾匁胡麻油にて煎泥の如して
白髪ぬけたるあとへつくべし三日此後
黒くなゆる　蘇頌圖經本草

○髪を黒くせんとおもふ
油と醋と等分に合黒大豆を煮てうく
煮たる時黒大豆を取出し油をどろく
もるゆゑ移りつめ髪につくれば一夜月
のうちに髪出く黒くなる　千金方

○又方

乱髪 男女のぬけたる洗て于胡麻の油にて
せんじつめ乾時粉にして油にて浮りて
髪につくれば髪長く黒くなる

聖恵方

○又方

槐子 そんじの実なり常に服バ髪鬚白
髪なく年老ても黒くもし

梁書

●面 うをのやまひなり

○面上に出来たる諸瘡にハ
胡麻嚼てつけてよし

外臺

○又方

艾弐ゑ醋にてせんじ洗めたる汁を貼て
よし

御藥院方

○面搔やぶり疵つさたるにハ
生姜のしぼり汁にて白粉を擦つけて
よし

医学六要

○面に疣目のおきたるにハ
艾にて三壯灸してよし

聖恵方

○腮腫たるにハ

赤小豆粉にして醋にて塗てよし　赤水玄珠

●耳

○聤耳汁おるにハ
伏龍肝（うまどの下れ灰の下れやけつらなり）綿に包て耳へ入き
日に三度入てよし　聖恵方

○耳腫痛にハ
五倍子（女のそぐろつくる時つくるしなり）冷水にてときぬるぞ
りしきめりそれなりにハ粉にてふりかけ
てよし　海上名方

○聤耳膿出るにハ
五倍子（女のそぐろつくる時はるしなり）耳の中へふき入て
よし　普済方

○又方
故綿黒焼にして綿にはくみ耳の中へ
入てよし　聖恵方

○耳鳴或ハ卒に痛にハ
塩わたしめじし枕とすべし冷れぞ入
わたしめてよし　肘後方

○耳痛まハ
砥まて小刀を磨砥の上ま黒くなりたる鉄
氣の水少耳の中へ入てよし　赤水玄珠

○一切の虫耳の中へ入たるまハ
胡麻油少し耳の中へ入てよし　医統

●鼻

○風氣もなくて鼻塞たるまハ
梁上塵　やまの下桁の上のなりなり　鼻の中へふさいれて
よし　普済方

○又方
釜の底の墨五分水まて飲てよし　普済方

○鼻の中より小指のごとくなる物出来て痛まハ
釜の底の墨つけてよし　千金方

○鼻赤くなりたるまハ
常に塩めじ口付てよし　直指方

○何の事もなくて鼻柱痛まハ
琉黄　けまのきさきなり　粉にして冷水まて
ときつけてよし　澹寮方

●口舌　口舌の病なり

○口の中一切乃瘡腫物にハ

五倍子　女のもぐろつゝみ時つゝみしなり　をりをてにし

龐氏傷寒論

○口の中悉爛て痛にハ

生蘿蔔のしぼり汁にてたびく口嗽て

よし

瀕湖集簡方

○又方

生姜のしぼり汁にて口嗽てよし又少し

のみてよし

本草

○舌より血出るにハ

小豆粉にして水にて煎し飲てよし

肘後方

○卒に舌腫て痛にハ

釜の下の墨酒にてときつけてよし

千金方

○小兒口瘡にハ

琉黄　つけ木のしきゝ水にてときあなの内

又あなの足のうらに塗てよし

危氏得効方

●牙齒

○齒齦より血出るにハ

百草霜をりつけてよし　集簡方

○又方

五倍子　女のきくのつくりはなり　黒焼にしてはなれば

よりまちやむ　衛生易簡方

○牙痛には

壁土粉にして塩等分に入よく炒右痛には右

の鼻の中へ吹入左痛には左れ鼻の中へふさ

入てよし　普済方

○又方

胡麻を水にてつるのごとくせんしいは

含嗽してよし　肘後方

○又方

黒豆一撮葱白三本艾一握川椒四十粒水茶

碗に二盃入一盃に煎暖嗽してよし　医統

○蟲くひ歯痛には

艾を火にて焼其煙を鼻の中へ入口より

其煙を吐出してよし　普済方

○又方

鼠粘子炒水まで煎じ嗽して
よし　延年方

○又方
石灰砂糖等分蟲齒の孔の中へ入て
よし　普濟方

○又方
石菖蒲の根咬爛して蟲齒の孔の中へ
入てよし　医統

○又方
絲瓜黒燒まして粉にして擦けて
よし　医統

○牙齒いたみ或ハうさるまハ
黒大豆酒にてせんじたびくしまて
みてよし　周密澹然齋抄

○又方
赤小豆粉にして齒にもりめり又ハ
鼻の中へ吹入てもよし　家寶方

○唇裂いたむまハ

青皮 茅なんのあたこ皮なり　くろやきにしてつけてよし

医学六要

●眼目　目のやまひなり

○眼暴は赤腫痛はハ

百年已上の古銭まて生姜をこそげて古銭の耳に汁をつけて眼にまとりつけてはし

私云百年以上の古銭とハ大方なり

寶文より瓶の銭まてえあれバよろしへし

宗奭本草

○又方

豆腐湯煮して眼の上にのせ置てよし

本草

○眼腫火のごとくいたむにハ

焼酒にてあらひてよし

本草

○又方

黒大豆煮てかくろに入眼胞のうへなであらためてよし

本草

○眼何となく痛にハ

布切を湯に浸わらしめ眼胞の上をなでおさしめ又大豆を蒸わらしてかくろにいれ枕としてよし

聖恵方

○涙多く出るには
塩を眼にまとりつけ冷水にて洗ては　范汪方

○眼赤く涙多く出るには
女の乳をまとりつけてよし　本草

○眼の中に瞖出来るには
塩をとりつけてよし　直指方

○倒睫痛には
毛をぬき捨て血を出して人の身にわる
風をとりつけてよし　本草

○小兒目の中に瞖出来るには
燈心に塩を付て目にまとりぬるべし　活幼口議

○雀目には
地膚子　ちくさぐれ　煎用を洗てよし　本草

○又方
生姜のしぼり汁にて洗てよし　医学六要

○又方
焼酒にてあらひてよし　医学六要

●咽喉　のどれやまひなり

○咽喉一切の痛にハ
胡麻炒粉にして白湯にて飲べし　三因方

○喉腫痛食のとおみにくきにハ
韮杵くだき項上につけてよし　医統

○喉痺にハ
足の三里に灸しそは　三里ハひざがしらより手下にわり穴なり　類經

○又方
醋のみてよし　萬病回春

●癭瘤　ちぶのこなり

○一切の癭瘤に用ゐし
牛皮油鞋底　黒焼にして胡麻油
にてときつけてよし　集玄方

○又方
上それ昆布よくあらひ塩氣のなきやうに
して醋につけとき口にふくこ嚼んだらうし
てハ又含みてよし　医林集要

●腹痛　そうれいこゝなり

○卒に胶痛にハ

柱のなれ石の上のかうりのやうなる土をあ
まてのみてよし

藏器本草

○又方
白砂糖をも酒茶碗に二盃入一盃にせんじ
のこしてよし

子母秘錄

○又方
塩湯多くのみてよし

古今医統
道藏經

○又方
胡椒わつさ酒にてのみてよし

食療本草

●脇痛 脇腹いたむなり
○右まても左までも脇腹痛にハ
黒大豆弐匁炒て酒茶碗に二盃入一盃に
せんじ用てよし

肘后方

○又方
葱までも艾までも韮までも菜までも
湯までわつくわつくあつ痛所を熨援てよし

医統

●腰痛 こしのいたみなり
○腰痛て起居し難にハ

胡麻香色に炒粉にして温酒或ハ生姜湯にてのみてよし

千金方

○又方

黒大豆五合水にて煮わつくなりたる時袋に入痛所にあてゝ熨てよし

延年秘録

○腰背腫し痛にハ

芥子粉酒にてとき貼てよし

摘玄方

○何ともしれぞ腰痛にハ

香油胡麻の油なり少し飲てよし

南史

○懐妊の女腰痛にハ

大豆酒にて煮て空心にのみては

心鑑

●疝氣

○一切の疝氣に

塩ながゝ焼く炒絹につゝみ痛所を熨てよし

玉機微義

○又方

葱白一握泥のごとく杵くだき臍のうへにときて其上に灸してよし

玉機微義

○疝氣發つて心腹腰痛にハ
胡桃黒燒にして酒にそのみてよし　本草

○疝氣腰痛にハ
雞子の黄なる所を白湯にまぜ飲てよし　本草

○又方
赤小豆せんじのみてよし又煮て食てもよし　本草

○常に疝氣ある人女に會て陰嚢へさしたみ痛ならざらしく死しすれにハ
竹筋　竹の鞘き皮をとりまぜうとまき木をけづりたり　或ハ水にそのみてよし　医学入門

○小兒乃疝氣にハ
胡桃せんじのみてよし　本草

婦人門
●經閉　月水の通ぜざるなり

○経水通ぜざる二三箇月になりても通ぜざるにハ
牛房を細に剉てむし袋に入酒の中に五日

浸至毎日空心に酒ばりのむべし　普済方

○經水二三年も通ぜざる腰脇痛寒熱往來するに芥子の粉弐匁熱酒にて食前にのこてよし　仁存方

●血崩　月水にかぶにおびてしく通じてやまざるにはなり

○經水卒におびてしく通じてやまざるにハ乱髪うれおちなり綿等分黒焼にして百草霜等分に合わせてかなり酒にて飲てよし　本草

○又方

椒目酒にてのみてよし　證治準繩

●帯下　しろちなぐらなり

○赤白帯下にハ

大豆酒にてせんじのみてよし　心鏡

○又方

椒目粉にして酒にてのみてよし　本草

○又方

糯米蜀椒等分粉にして糊に醋をまぜて丸しのこてよし　本草

○又方
蕎麥粉雞子清まて丸じて五十粒づゝ
白湯まて用てよし
種杏仙方

○又方
竹茹 竹のまさ皮をうづりまて少し火まて
うとまきまとけづくろなり
あぶり粉にして一度に壱匁づゝ白湯にて
のゝてよし
普濟方

●産前

○懷妊の内に風引くるにハ
伏龍肝 かまどの下の灰の下れ壱匁粉にして
白湯まてのゝてよし
傷寒類要

○懷妊の内何とをなさに腹痛にハ
塩一撮赤く燒酒にてそく飲てよし
産寶

○懷妊の内腰痛にハ
艾酒まてせんじのゝてよし
子母秘錄

○懷妊の内に下血やまざるにハ
艾酒まてせんじのゝてよし
時後方

○懷妊の内經水通ざるにハ

赤小豆粉にして酒まてきる宛飲てはし　千金方

○胎内れ子動て胸までつさ上げ痛まハ
艾醋まてせんじのみてよし　子母秘録

○又方
梁上塵やねの下れ桁の上の竈突墨釜れまんけのへそ
不の墨なり　右二色等分酒まて飲てはし　千金方

○胎内れ子哭まハ
鼠穴土一槐水まてのみてよし　種杏仙方

○又方
其妊婦腰とかゞめて物を拾ふやうにすれ
ば忽止　丹臺玉案

○胎内の子動て下血をうまハ
葱白十本水まて濃せんじてのむべし
子胎内まて死されば自出づ又死ざれば
何のるすもなくしづまる一度のみて効
なくハ再のむべし　深師方

○六月七月乃比胎動て痛しのびかたきまハ
葱白水まてせんじのみてよし　楊氏産乳

○又方
鯉を煮て食てよし
種杏仙方

○子墮としてあるよハ
五倍子 女のたぐろつくりとき
てろうしなり 弐ゑ酒まてのみ
てよし
朱氏集験方

○懐妊八九箇月のころ腹の内動て子生れんと
さるよハ
梁上塵 やねの下れ柳の上の
かたりなり 釜底墨 釜底の
すゝなり
酒まてのみてよし
本草

○胎ありとやとく一人も二人もありしかあるとに
懐妊して又墮胎をうまて腹心あしきよハ
赤小豆を女粉にして酒まて用ゼ
千金方

○横産或ハ逆産ハ生れんとするよハ
伏龍肝 かまどの下れ灰の上の
かけたなり を女粉にして
酒まてとき母れ臍の中につけてよし
救急方

○逆子ハひまれんとするよハ
手れ中指ハ釜のうしれ墨をあつくつけて
生るし子の足のうしにつれば平産す
千金方

○横産逆産生れんとするにハ
梁上塵それの下柳に上の
つそく平産を
三ヶ酒にそのみそさ
子母秘録

○逆産に生れんとするにハ
塩をもに付て母の腹又生るゝ子乃足の
うらに貼て爪にて搔重し
千金方

○又方
其父の名を生るゝ子の足乃うらに書ぞ
平産す
種杏仙方

○子腹中にて死るゝにハ
伏龍肝下ばやけらなり三ヶ酒にて飲下
十全博効方

○又方
大豆醋にて煎じのむ重し
産乳方

○子生れかゝるにハ
赤小豆七粒生にそのむべし催生薬に尤妙
なり
産寶

●産後

○胞ありざるにハ

家の中の柱のなかの石ずえの上のほこりのやう
なるものを雞子の清にてとくそのむべし
そのまゝなりる

本草

○又方
其産婦の二布井戸の上に引張ばそのまゝなる

千金方

○又方
産婦の是て居る忌物を竈の上にかくれば忽なる

千金方

○又方
大豆酒にてせんじのむべし

産書

○又方
男の子を産るには赤小豆七粒生にてのみ
女の子産るには赤小豆廿を粒生にての
むべしそのまゝなりる

救急方

○又方
水茶碗に一盃醋茶碗に半分入て産婦の
顔へふきかけてよし

聖惠方

○産後血ぢりるには
伏龍肝やけ去るりの灰の下の
そを粉にして

酒にてのみてよし

救急方

○血上り眩るにハ

黒漆にて塗たる物を何にても火に焼て

産婦に鼻の中へ煙を入れどよしし

綱目

○産後古血おりざるにハ

艾弐ゟ生姜弐ゟ水にてつゐれどく煎ど

用てよし

孟詵食療本草

○産して後産門のひろがり閉ざるにハ

石灰をゟ黄色に熬常のごとくせんじて

其湯氣にてむしてよし

時後方

●乳病　ちのやまひなり

○乳たらざるにハ

赤小豆水にせんじてのみ又其小豆をも

食てよし

産書

○又方

胡麻炒塩少し入五七日食へバ乳乃出

ろるす泉のごとし

唐氏

○妬乳初てかたり痛にハ

醋にて粱上塵（きのうへのちりなり）をときて乳
にぬりてよし　千金方

○乳の上の腫物には
胡麻炒焦し粉にして燈油にてとき
つゞ蛋し　本草

○乳癰には
雄鼠屎（友方とぶりたち鼠のふんなり）七ツ粉にして酒にて
のむべし汗出てよし　壽域方

○又方
葱白切爛て熱　帛包て乳の上をたびぐ
熨てよし　種杏仙方

●前陰　小便道の病なり

○女れ前しきりに痒或ハつぶくと汗ばのやう
なる抱出来たるには
胡麻口にて嚼たらかし付てよし　肘后方

○女れ前腫或ハこまりたる瘡出来たるには
硫黄　つけ木のもとさくとりなり　粉にしてつけて
よし乾て付ばたきには唾にて付てよし　肘後方

○女の前しきりに痒にハ
蒜水にてせんじ其せんじしるにてさび
さびわらひてよし　医統

○女男に會度に前より血出るにハ
五倍子　女のたぐろつる時つゝろうしなり　つけてよし　熊氏

○女の前廣て中冷るにハ
硫黄　つけ木のすゑ　くまりなり　せんじ洗てよし　心傳方

小兒門

●初生　生れおちる時なり

○小兒生れ落ちる時胎毒と下をにハ
胡麻生にてよく嚼爛りし絹につゝみて兒の
口に入乳のごとく吸しむれば胎毒下りて
よし　外臺

●不乳　生れさめ乳にのこつゑるなり

○小兒生れて乳をのまざるにハ
葱白一寸四ツに剋乳をかし入よくせんじ

其乳を用ゐし

● 不尿　生れ子小便せざるなり

○小兒生れ出て尿せざるよハ

葱白一寸四ツに刻て乳を少し入せんして其乳をりらゐべし

全幼心鑑

● 大小便不通

○生れ子大小便せざるよハ

婦人口をよく洗て其生れ子の心と夜の手の中と夜乃足のうらとを吸ゐし

幼幼新書

● 撮口　口を閉啼聲出さるなり

○小兒生れて七夜が中に啼聲出ぞ唇青く乳をのこらるよハ

塩を臍の中に入其上に灸してよし

子母秘錄

● 臍風　臍より風引さる病なり撮口と似たる病なり

○臍より風引て乳をのこらるよハ

艾黑燒おして臍乃中へ一ツに入紙にてをさしてをく重し

集簡方

● 臍瘡　臍より汁出るなり

○小兒臍より汁出或ハ腫痛ニハ
伏龍肝 かまどの下の灰れ下の 粉にしてほけて
よし
聖惠方

●口瘡 小兒の口中れやまひなり

○鵝口舌一面に白く或ハ舌の下に少くさ舌の様なり
物出来たるにハ
赤小豆粉ゆして醋にてときあるべし
普済方

○鷲口一面に出来て舌白さるにハ
燕脂 女の口につくるとさゆりてよし
集簡方

○口中に細なる瘡出来たるにハ
釜下黒つけてよし
普済方

○舌の下に又舌のごとくなる物出来たるにハ
伏龍肝 かまどの下れ灰の下の 酒にてときつけ
てよし
千金方

●軟癤 なつぢしのなり

○暑き時小兒の頭になつぢ出来たるにハ
胡麻炒焦しあつきたるに嚼爛にして
つけてよし
譚氏小兒方

●丹毒　たゞくさのるすなり

○小兒丹毒一身いづこまでも春霞のごとくひらく
と赤く出たるはハ
大豆濃せんじて其汁をぬるべし　千金方

○又方
雞子の清まで赤小豆の粉ありてはし　小品方

○丹毒頭より赤こおたるはハ
葱をりつゞしてその汁をしぼりつけて　唐仲基方

○丹毒いづこよりなりとも赤こおたるはハ
醋まで石灰をときつけてよし　摘玄方

○又方
伏龍肝　かまどの下の灰の下の粉にして新汲水
までときつけてよし　肘後方

●夜啼

○小兒何のるすもなきに毎夜ぬるに時分に極て
啼はハ
燈花をとりてさゝして乳まぬりて小兒の

口へ入なり

○又方

五倍子 女のたぐろつくるとき 唾まてこねて小兒の臍につくべし

楊起簡便方

●盤腸 小兒寒氣にあたり腹と痛身と曲て啼病あり

○小兒腰を曲て多く啼き腹痛にハ

葱あつく炒つきたぐさ臍乃上に厚くのせとくべし 去ぐらくのうちに尿出て痛止なり

湯氏嬰孩宝鑑

●語遲 ものいふ事なきなり

○小兒四五歳まてものいハざるにハ

赤小豆粉にして酒にてとき舌の下に度くつけてよし

千金方

●驚風

○小兒物に驚びくくとしてあるにハ

乱髪 男女のかまれなりなり 黒焼にして酒にてのませてよし

千金方

○又方

雞子をりつぶしのませてよし　本草

○驚風遍身黒くなるよハ
赤土醋にてしめらせわつて炒紿に包惣身
と足の方へ熨してよし　小兒秘訣

●痒

○小兒乃痒症一切の食物を間をなくくひたがり
大小便水のごとく泄氣ぶしやうなるよハ
艾五分水茶碗に一盃入半分に煎用べし　備急方

●痘　かうさられるなり

○疱瘡いまだせざる子に
十二日に梅の花をとりて陰干にして蜜にて
丸じ酒にてのまされバ疱瘡せず　種木石仙方

外科門

●癰

○背れ手打かけ熱して痛ミ何となくむかしき
時紙にて拔あまてぬらし彼かめく所に強付
てしるべし一番に乾而これするなり癰の

口になる和なり其取は艾まで百壯ほど灸をもぐ
痛者ハ痛止痛ざるハ痛おて多ハ散てよし
もしちらずして口あきても内攻の患なく
愈やとし

李絳兵部集

○既に口出来て腫たるにハ
黒大豆生まで粉にして水にてとき付べし

本草

○又方
赤小豆粉にして水にてぬるべし一切の腫
物にもよし

小品方

○又方
伏龍肝 かまどの下の灰乃下の蒜等分に合杵爛
やけつらなり
して泥のごとくしてつくべし乾べ付るべし

外臺

○又方
米の粉四又葱白もしくひとつにして黒くなる
ほど炒て醋を入こねてつくべし癰疔そのかゝ
一切の腫物腫て硬く無頭者にハ先付ては

外科精義

○癰疔其外一切乃腫物口愈ぎ濃出るにハ
胡麻黒くなるほど炒粉にして付てよし

千金方

●疔

○疔ハ頭面手足ニ生ヲ紫色にして泡のごとく頭ハひきくて丁盖のごとしよべて先此藥を付てよし

乱髪 うものぢらなり 鼠尿等分黒焼にして針にて腫物の口をかしあけ右の藥を吹へてよし

聖恵方

○又方

門の戸れ樞の下の五取来りて人にもらせば蒜にてもりつけてよし

魯府禁方

●便毒

よこねのるなり

○便毒腫痛ニハ

五倍子 あをぐろつゝ得てくろしなり 五鍋の中へ入醋ちかりと入火をゆるくと煎つめどろくとなりしろ時或ハ布ニ綿ニ貼てつくべし乾バ度くかへてよし

本草

●下疳

陰莖のやまひなり

○前陰たゞれ或ハ瘡出来ころにハ

乱髪 うものぢらなり 黒焼にして付てよし

心鑑

○又方

五倍子 女のたぐろてゝ角 てゝろしなり 黒焼にして付ては 種杏仙方

●臁瘡 たぐさうさのるなり

○臁瘡汁あるよハ

塩をとりつけてよし 永類方

○又方

五倍子 女のたぐろてゝ角 てゝろしなりとりつけては 種杏仙方

○臁瘡久しく愈ざるよハ

杉木黒焼にして胡麻油にてとこさ付ては 救急方

●疥瘡 ひぜんがさのるなり

○疥瘡手ゐく惣身まで出たるよハ

竹の葉黒焼にして雞子清にてぬりては 楊氏産乳方

○疥瘡おまて日數なさよハ

塩を唾にてつけてよし 千金方

●癜風 ごまづのるなり

○癜風白くても赤くても此方を用ひてよし

生姜れもぎり汁と茹帯にてとりつけて 妙

日ぐりしして愈る 医統

○又方

小麥黒燒にして鉄の物にてたして油をおしすりつけてよし

医学正傳

○又方

布切を板の上に四方を針にて打付硫黄をつけ木のちさきことりなり粉にして雞子清にてこねて波の布切にとりつけ布切縮ざるやうにして乾付とき瘢風の上を度くことりてよし

医統

硫黄つけ木のちさきことりなり粉にして生姜れしぼり汁にてつけてよし

癘瘍機要

●厲風　癩病なり俗に云さんびやうろうのことなり

○癩病爛てしめり汁おろにハ

五倍子　女のたぐろてろときつぶしてろしなり　唾にてこねて付し

普濟方

○又方

生の竹の筒十に黒大豆を一盃につめ又生乃竹の筒に乱髪のものなり一にいしめて稿れ火にてたけば生竹より汁おりなり其汁を盃

まうけをきて急れぬれて瘡の上にまつくおし
一切の腫物にもよし
●諸瘡 惣じ瘡の類いろくの藥をあつめ記を
邵真人經驗方

○惡瘡久しく愈ざるまハ
家三軒の椀乃洗汁をあつめ塩少し入て
其瘡を洗てよし
簡要濟衆

○又方
石灰雞子清まぜこねてよくあぶり粉にして生姜のしぼりしまて付てよし
救急方

○面に出来たる瘡にハ
柳の木塩少し入きせんじ洗てよし
李樓奇方

○一切の惡瘡又ハ疥瘡にも
燈盞の油ぬりてよし
本草

○小兒の腑瘡にハ
綿 木綿なり唐綿なり黒燒にしてつけてよし
傅氏活嬰方

○小兒の頭瘡にハ
皮鞋底 あつさせんとの皮 洗きよめ煮爛てつけてよし
聖惠方

○又方

黒大豆よく炒て粉にしてあまそときほく

登し

普濟方

○漆瘡にハ

磨刀石上泥刀をとぐ砥ぶりあり ぬりてよし

医林集要

○又方

韮葉をりつけてよし

医林集要

○又方

蜀椒のせんじ汁にて洗てよし

医林集要

○又方

杉の木せんじ洗てよし

衛生易簡方

○漆にまけよき人漆にまけぬ方

川椒のせんじ汁と面手胸などにぬりてとけ

じ漆いらひてもまけず

物類相感志

○白屑おほく出来にハ

藜蘆のせんじ汁にて髪を洗髪乾て後

藜蘆の粉を髪の根へをりけてよし

医学入門

○臭九瘡にハ

葱のせんじ汁まてあらひよく拭乾し胡
麻油つけてよし

外科正宗

○疣瘡はハ
初は出まさらに灸をすれば皆愈る

医学入門

○瘭疽おこりて指痛はハ
伏龍肝かまどの下の灰の下にやけつらなり 竈突墨かまのうちなるきたのすゝなり
竈屋塵かまどにつきたるすゝなり 三色合て濃せんじ洗て
よし

瘍科準繩

○天蛇頭はハ
雞子に穀を開汁をあしつけてよし

瘍科準繩

○乾癬はハ
巴豆炭火まてわぶり油をよくあして後つき
くぐきさきりつけてよし

瘍科準繩

○又方
馬齒莧すりつけてよし

瘍科準繩

○又方
梅干 蒜 梁上塵やねの下桁の上のかたりなり 塩 右等分
醋は一夜浸つけてよし

瘍科準繩

○又方

日中に日向へおて乾癬の不を日まわてその日蔭の地に三壯灸をべし

瘍科準繩

○痱瘡には

滑石五分 菉豆粉四匁 あつまてとさつけてよし

瘍科準繩

○嵌甲疽には 足袋につまりてわしのこれらなり

陳皮 こんの皮なり 濃せんじ洗てよし

医学入門

○又方

梅干の肉をりつけてよし

瘍科準繩

○一身に猫の目のごとくなる瘡おまて膿血なく痛痒には

雞葱韮を食てよし

夏氏益寄疾方

●杖瘡 人またれ又は打身の類を記を

○人に杖棒にてさくれ痛には

伏龍肝 かまどの下の灰の下のやけつちなり 粉にして油にてときありてよし

千金方

○又方
胡麻油あつくしよし鐘に一盃のみては　吹劍續錄

○又方
五倍子　女のそくあつくろ付すつくろふしなり　醋にてときぬりては　衛生易簡方

○又方
大豆粉にしてつけてよし　千金方

○高所より落或ハ骨を打折痛にハ
大豆せんじのみてよし　千金方

○一切の打身皮破ざる者にハ
生蘿蔔の汁つけてよし　邵氏方

○一切の打身にハ
生姜のしぼり汁酒等分に合温飩の粉
とこゝて貼てよし　易簡方

○又方
石灰胡麻油にてつけてよし　集簡方

○又方
胡桃の肉酒にてしめし拌ぐさのみては　医統

○又方

葱白杵爛あつくいりて其痛むうへに置て
わためてよし　葱白冷バさひくゝかへつけ
てよし　正體類要

●金瘡　さりきどなり

○金瘡血出てやまざるにハ
釜臍墨をりつけてよし　開寶本草

○又方
香爐灰はけてよし　本草

○又方
五倍子　士のちぐろつくろ　つくろふしなり　はけてよし　談埜翁方

○又方
葱あつくあぶり汁をしぼりめりてよし　梅師方

○又方
生姜嚼つけてよし　扶壽方

○又方
石灰つけてよし白壁とこそげつけてもよし　肘后方

○金瘡血多く出てとまらず身冷まバ死を早く
塩を炒て三撮酒にて用ゐし　梅師方

●湯火傷　やけどのまするり

○火にても湯にても人乃身にかゝりやけどしたるにハ
井戸の底の泥ぬりてよし　證類本草

○又方
胡麻生にて嚼つけてよし　外臺

○又方
醋にて洗てよし　北夢鎖言

○又方
生蘿蔔のしぼり汁つけてよし　聖濟總錄

○又方
石灰水にてときつくべし　肘后方

○又方
灰水にてときつけてよし　医統

○火にて焼しるにハ
酒にて洗ひ其あとへ塩をつけてよし　医学六要

○熱き酒かゝりて痛にハ
糯米黒く炒粉にしてつけてよし　医学六要

○灸瘡　さうのいぼうくるるなり

伏龍肝（うまやの中の灰の水にせんぜ洗てよし）

千金方

○又方

春ハ柳の白き花をつけ夏ハ竹の中の紙をつけ秋ハ綿をつけ冬ハ兎乃毛をつけてよし

資生經

●虫獸傷　むしのさしたるなり

○蛇足に繞て解ざるにハ熱湯かけてよし

千金方

○又方

小便しかけてよし

肘后方

○毒蛇のさしたるにハ

塩嚼てぬり其上に艾にて三壯灸して又塩をぬりてよし

徐伯玉方

○又方

艾にて灸してよし

集簡方

○又方

生姜のしぼり汁つけてよし

本草

○蛇のさしたるわと瘡となりたるにハ

わつさ酒にて度々洗てよし

廣利方

○蜘蛛くひて痛其外一切の虫のさしたるまハ
胡麻のこゝでらしつけてよし
經驗後方

○蜘蛛のさしたるまハ
生姜の汁つけてよし
本草

○蜈蚣さしたるまハ
塩をとりつけてよし 或塩湯にてあらひてよし
梅師方

○又方
蝸牛をもつてほけてよし
鐵圍山叢談

○又方
雞子清ぬりてよし
瘍科準繩

○螻蛄人をさしたるまハ
石灰醋にてときつる
聖惠方

○蜂のさしたるまハ
塩をこつけてよし
千金方

○又方
小便にて洗てよし
肘后方

○又方

其されたり雨を湯に浸してこしらし
湯冷バ度くかへて浸すべし　大平御覽

○刺毛蟲たるにハ
伏龍肝（かまどの下の灰の）れやけつちなり水にてときほけて
よし　瘍科準繩

○蚯蚓さして毒内に入肩髪ぬけ癩病のごとく
なるにハ
石灰のみにて洗てよし　經驗方

○小兒蚯蚓に小便しつけて前陰腫たるにハ
火吹竹にて吹竜し　本草

○田などへ行者蛭にさしたる方
油に塩を入て手足にぬれば蛭ひつてさず　病源候論

○夏の夜蚊の無きまじない
端午日午時儀方の二字を紙に書て柱毎に
張ぞ蚊なし　種杏仙方

○蠅子の無きまじない
端午日午時白の字を紙に書て柱の上の方四所
に張ぞ蠅子なし　種杏仙方

○猫の咬たるには
雄鼠屎 友方とりぬすのえんなり 黒焼にして油まそつけ
てよし
壽域方

○鼠の咬たるには
猫の屎ほけてよし
本草

○犬の咬たるには
雄鼠屎 友方とりぬすのえんなり 黒焼にして油まそつけ
てよし
梅師方

○又方
犬の食たる不ゆは三壯灸してよし
内經素問

●骨鯁 魚の骨又は竹のくいなど咽にさしたるなり

○魚鳥の骨咽にさしたるには
五倍子 女のこころつくる附つくるなり 細茶 引茶なり 等分咽に
入るれど忽によし
口齒類要

○又方
水茶碗に一盃酌屈て左の眼にそのを見
とり左の眼にて右の中へ龍といふ字を書
入れてのむ奩しもし小兒に骨たちたる

ハ傍の人前乃ごとくしてあを小兒ハの
ませてよし　医統

○又方
餳糖　地もちせんまそもちりちめまそ一塊のみそよし　陳氏方

○又方
醋一ていのみてよし　丹溪方

○又方
韮の白少く切針まそ糸を通し針をぬき
て糸をもハ持韮を骨乃たりたりまで
のこしみて糸を持てそろくと引出せば
韮ハ骨たりてあり　古今秘髮方

○又方
犬の涎とりてのみてよし　萬病回春

○又方
別の魚の骨一なを其骨たりたり人の髪に
挿て人にしらせねばさろそくぬらり　種杏仙方

○髪のおち咽喉にたりたりハ
古き木櫛黒焼にして酒にそのみそは　斗門方

○又方

自己の髪黒焼にしてきは酒にそのみて
よし

延齡至寶方

○錢を呑さるまハ
炭粉にして白湯にそのみては

口齒類要

○金銀をのみさるまハ
琉黄つり木のちきりくとりなり石灰等分酒にそのみて
よし

孫用和秘宝方

○又方

艾水にてせんじのむべし

錢相公餞中方

○小兒針をのみさるまハ
黒砂糖丸し用ひてよし

濟世全書

●五絶
縊て死さると魘て死さると高より落或ハおし
まわれて死さると水に溺て死さると凍て死
さると五色の死死てうのきさハたをり
らるべし

○自縊死さる者あらバ除に縄をゆるめ上下に被
をさせ一人ハ其の足に縊者の其の肩をふまへ
てまはして力一ともい髪を引直し

利髪にて髪
るゝハ其の耳のわなへ

中指とさし入て引べし又一人ハ脇の上とさすりべし又一人ハ臂と足とをのべたり屈たりすべし半時ばかり如此とれハ息出ろなり息出て後又半時ばかり前のごとくして後粥清とすゝし用ゆべし人大勢有下なるバ右乃外に又女人して病人の女の耳を筆の軸にて一度に吹至し猶以よし如此してハ活ざる者なし朝縊て暮に見付たるハ死切身冷てゝも活とし夜中に縊て明朝見付たる活がたし

金匱要畧

○又方

梁上塵 やねの下 例の上乃 おこりなり 豆の大さなど筆乃軸に入れ同じやうに四ツこしらへて四人して病人の鼻の孔女の耳へ左ハ宛さし入四人息をそろへ一度に力一ぱい吹入至し即活なへろ

外臺

○又方

葱の長さ六七寸病人の女の耳鼻へさし入る至し血少し出て息出至し

本草

○魘死者あるバ左づかにまでも又ハ風呂敷乃やうなる物にても病人の口鼻にあてゝ息の出

ぬやうにして蒸べし扨病人の眼開たらバあつき小便一ぱい口ふ入蒸し暫ありて正氣よなる

○又方

伏龍肝（うまどの下の灰れ下のかりつらなり）粉にして弐ぶかど鼻れ中へ吹入てよし

千金方

○鬼魘死ハ喚活べからず其病人の脚跟を力一ぱい口ゆて咬べし又其病人の面へ唾を吐かくべし初より燈あらバ燈を匿蒸しをし初より燈なくさくらがりゆて魘死たるよハ燈をとも

をとるべし

○又方

梁上塵（やれ下桁の上のかうなり）鼻の中へ吹入べし

瑣碎錄

○又方

温酒面よりれバ活る

肘後方

○人晝夜とをに何の故もなく死入たるよハ葱七八寸鼻乃中へさし入るべし血出て甦男ハ左の鼻れ孔へ入れ女ハ右の鼻れ孔へさし入るべし

此扁鵲傳なり

崔氏纂要

○溺水て死ようにハ
塩を臍の中へ入盃べし　救急方

○又方
石灰を布切に包て尻乃穴へさし入れ盃べし
暫して水出て活　千金方

○又方
竈灰二石に病人を埋盃べし水出て活　金匱要畧

○又方
梁上塵やねの下の桁の上のかたりなり鼻の孔へ吹入てよし　本草

○高き所より墮大木大石に打れ或ハ馬より落ちたる
病人の口鼻眼の上に風ろしきのやうなる物と
かけ息の出ざるやうにして盃べし暫とれば
息出るなり息出眼開バ焚き小便をのまを
べし　千金方

○高き所より墮絶入らんとして言ることなるにハ
急に焚き小便のませてよし　医学六要

○冬日凍死て四肢直に口噤少し息ぞうりあるにハ
大釜にて灰をあつく炒袋に入て心上と熨てはし

冷れば換へ置し眼開息出て後粥清を少つ用て
りしもし火にて温れば早速に死を
壽世保元

○又方
急に地を深さ二尺ばかり長さ六七尺に堀て炭を
多く火におこして彼穴乃中に焼きて穴の中に
くわらまりきる時火を取のけ莚をしき其上
に病人を卧させ上に物を多くさせ足置し
汗多く出てよし
●中惡
夷堅志

○死人の氣にあれ或ハ墓に行などして死人の毒氣
にあたり腹痛にハ
鍋墨五匁塩を匁白湯にてのみてよし
千金方

○又方
塩赤くなるなど炒て酒にてのじ置し痰を吐て
よし
甄權藥性論

○あしき夢を見て覚ても身に青きあとありにハ
塩水のみてよし
救急方

●雜病
山蔵にいろくにやまひの茶をのす

○狐臭にハ
伏龍肝 かまとの下の灰の粉にして塗くまりにけてう
千金方

○又方
生姜のしぼり汁つけてよし
易簡方

○轉筋腹に入痛にハ
鉛墨を白酒にてのこしてよし
肘后方

○脚氣にハ
毎夜塩を腿膝にまとりぬりて毎夜熱き湯に足の甲まで浸してわたしひべし
救急方

○消渇して水を飲にハ
五倍子 女のちぐろつら時つるかしまりを白水にてのこしよ
危氏得効方

○手足の霜腫にハ
山藥竹の葉にてこそげつけてよし
儒門事親

○耳の霜腫にハ
生姜のしぼり汁わたしめつけてよし
假日記

○世間に流行病わかしこさうつらぬ方
新しき布の袋に大豆を入れ一夜井の中にほけ

蓋翌日取出し一人に七粒づゝのめばいやりやまひ
うつるべし

領要

○又方

新しき布袋に赤小豆を入れ井の中に三日浸し
出て三月目の夜取出して家内の人不残新汲
水にて東に向ひ男ハ三十粒女ハ二十粒づゝ三日
のび出し流行病うつるべし

医統

○疫病うつるめ府

籠簾し　如此紙に書て門口におせば疫病
まづ〳〵もづす

群談採餘

○一年中流行病にそまざる方

正月朔日ゟ十五日ゟ夜日の内赤小豆十四粒胡麻
七粒井の中へ入るへし其水を飲ば年中やまひ
なし

五行書

○又方

元日東に向ひて韮と小豆とをのめば年中
病なし

本草

○又方

立秋日七月の酉に向ひて朝の一番水にて赤
小豆七粒のめば年中痢病をもつらいど　本草

○瘰癧には
芥子の粉醋と酒とにて貼てよし　肘後方

○又方
五倍子　甘のぐろつくるなり　醋にてつけてよしこれ
破バ蜜にてときぬるべし　魯府禁方

○身面に疣出来るには
醋に石灰を浸して上汁を度くつけては　千金方

○竹木刺肉たらくるには
頭垢ぬりてよし　劉涓子

○又方
梅干の肉をりつけてよし　梅師方

○又方
生姜　橘皮　塩等分水にて煮つけてつくれば
即出る　医統

○又方
胡椒の粉食粒にかしませつけては　瘍科準繩

○人の咬付て痛まハ
皿に熱き小便入れ一夜ひたしてよし　通變要法

○陰嚢しきりに痒まハ
五倍子（女のたくろつく角つくろふしなり）とりつけてよし　本草

○惣身に虱多くわきて後まハ血肉壊痛痒まハ
醋に塩を入れせんじのみてよし　奇疾方

○小便の中より屎出大便に小便を出すまハ
舊幞頭黒焼にして酒にて五分許のみてよし　怪痾單

○焼死て息いまだわかまハ
小便多くのませてよし　千金方

○鍼をたてゝ折込たるまハ
何鳥の羽根にても四五枚黒焼にして醋にてとき折たる鍼の上に貼紙にてちたして屈べし折たる針自出　鍼灸聚英

○又方
象牙の屑をつけてよし　肘後方

○灸していがいね人いがたきんと思ひ
故草履のうらを火にてあたりにあぶり灸

の上となつまバ三日の中にいかゝ

甲乙經

○五穀其外一切の食物をくらぬ事も病なくも足れ力少も衰ざる方

白米 三斗を井籠に入れ百度蒸干盃一握づゝ毎日水にて三十日のみぞ死まで一切の食物をくらぬ事

壽世保元

○又方

黒大豆 よくせして一日食物をくらず翌日かの黒大豆食て外の食物を食事なく渇時ハあるをのむべし如此一年程をれば後に八一切の食物を食るなくて仙人となる

博物志

○又方

黒大豆五合胡麻三合水に一夜浸し蒸夏三度秘よく干て二色ともにまして皮を取つきくごとき拳れ大ようね甑の中に入て戌の刻より子の刻まで蒸して翌日寅時に取出し日に干付て食べし拳の大ようねこうを十つ食へて七日飢ぬ二ツ食へて四十九日飢ず

三ツ食へば三百日飢ぜず四ツ食へば二千四百日飢ぜず顔色かとろへぜず手足の働少も變事なし

王氏農書

私云右三方ハ唐土にて飢饉の時に多く人を濟ふ名方なり米價貴をくらしむ人ハ早く調合して用ゐし

○人の通ぬ谷又ハ井の中なとへ落入或ハ海上にても一切れ食物なさ不にて命をつなぎ給ひし五躰氣力衰ざる方

口に唾を一ぬいくりてハのみこみ又なりてハのみこみ如此とろる一日一夜に三百六十度のところハ何十日にても死せず

壽世保元

私云十箇年許已前に予武州に住し比常に心安く交る僧祈願ありて七日斷食して禮拜行道を同行の僧一人あり彼僧に右れ唾をのみこむ方を教ゆ彼僧深く信じて相勒む同行の僧ハ嘲笑て不用行法六日に至て同行の僧ハ手足痛殊外にくるしむ又唾のみこみし僧ハつゐに變事なく行法をとし

こゝろく成就し候りし

○落下頬　おとがいのおとかれつれさるなり

病人を正しくかしこまらせ正面より外の人頬をあ
のみに持上げ友の大指を病人の口に入一拍子に
あり上れば忽愈

外科正宗

○傳尸労瘵病付て間の無き中に用ゆれば愈方

川椒内の白膜と目とを取捨て川椒の赤形づり
火にてかし炒汗を出して後ようさ成し粉
にして式匁つゝ空心に食れ湯にてのめん虫
ばりてよし

種杏仙方

○男女前陰の毛に虱こちさあ癢に八
銀杏皮をとりて擦つけてよし

六要

○又方

朱をとりつけてよし

六要

袖珍仙方　畢

正德五年乙未二月吉日

書林

京姉小路通堀川東入町

中川茂兵衛板

妙藥不求人跋

不佞一日候油小路宰相公談迨古今云曰有人之急疾也蓄藥難設迎醫亦遲豈不大患哉予曰僕每閲方書易簡之方経験之治急疾者必録之號妙藥不求人藏

笈中既久焉以呈云云深愛之而
加後序可傳不朽貴命不啻
再校正以壽梓云爾

正徳癸巳九月甲子

法橋奈良宗哲

[illegible]

1/3239.

右者 油小路宰相殿御自筆也

